

母



(エ)

尹興吉

母

(エミ)

尹興吉 安字植訳

新潮社版

母 (エミ)

1982年8月20日発行 1982年10月25日3刷

■ 著者 ユンフンギル 尹興吉

■ 訳者 アンウシユク 安宇植

■ 発行者 佐藤亮一

■ 発行所 株式会社新潮社

郵便番号162 東京都新宿区矢来町71 振替東京4—808

電話 業務部(03)266—5111 編集部(03)266—5411



■ 印刷 大日本印刷株式会社 ■ 製本 株式会社大進堂

定価1600円

© Yun Hung gil, 1982 Printed in Japan

乱丁・落丁本は御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

母(エミ)・目次

第一章 山とつつじと、そして髪の毛

5

第二章 合歓の花の舞 36

第三章 滞っている時間 77

第四章 祝福されざる出生 112

第五章 魂 火 148

第六章 《お前の父親は、弥勒様だ》

188

第七章 原始人たちの住む村 250

第八章 自ずからある山 295

注 解 312

日本語版への著者あとがき 315

訳者解説 319

装画
宋繁樹

母
(エ
シ)

第一章 山とつじと、そして髪の毛

1

いよいよ山が見えてきた。

山は見栄えのしない、けれども邪氣がなく、そのうへ響えようもなしの怠け者に見える鉄灰色のどっしりとした図体をこちらへ転がせあちらへ遊ばせして、視野いっぱい立ち塞がってくる深くたちこめた砂埃の壁を払いのけながら、それと気づかぬ間に一步また一步と迫ってくるころだった。いうところの弥勒山である。

車体が激しく上下するようになってきて、いきなり体が宙に跳ね上げられたと見るうちにぼくは座席へ投げだされた。路面の状態でそれはもう話にならぬ石くれだらけの田舎道を走る間、メーターの走行距離とはかかわりなしに裡里駅前から高い料金で借り切ったタクシの若い運転手は、ガムでも噛むようにひっきりなしに歯と歯の間に罵声をはさんでいた。運転手の若さと口汚ない罵声に似つかわしく、

ハンドル捌きのほうも未熟なうへ乱暴そのものときていたから、車体がひどく揺れ動くたびにぼくは胃袋がのたうちまわる苦しみを味わわれた。

「停めてくれ」

にわかにもよおした吐き気のせいで、ぼくは運転手に重ねて荒々しく声を張り上げなくてはならなかった。

「車を停めろといってるのがわからんのか」

ぼくはすぐさま道路脇の草むらにしゃがみこみ、右の手から狩りだした二本の指を咽喉の奥まで深々と差しこんだ。ところが、食道の壁を掻きむしるようになってこみ上げてくるげえげえいう声と、それにともなう痛みとが賑やかに聞こえるだけで、結局のところ何一つ吐きだすことができなかった。それもそのはず、基脊からの最後通牒にひとしい胸を衝かれるような電話を受けてからというものの、たてつけに二度も食事を抜いたうえ、空きっ腹に酒を流しこむだけで済ませてきたのだ。そのためむずかる子供をあやすようにしてつとめてご機嫌を取り結び、どうにか宥めてきた胸のむかつきを、激しく揺れ動く車体の衝撃がまたしても呼び戻したのだった。吐き気をもよおすたびに五臓六腑はのたうちまわるのに、吐物をともなわぬ空嘔吐のくり返しは、いっそのこと胃の内容物を残らず吐きだしてしまつたほうがずっとすっきりすると思われるぐらいの苦役であ

った。

その辺は、肌理こまかに挽かれた澱粉を思わせる白っぽい砂埃を、表層のように厚ぼったくかぶっていた。紅紫色の穂をつけたまま群れをなしているはなたでなどが、ぎらぎらと照りつける真夏の暑い陽射しの中で、風に微かにそよいでいた。吐き気にたたられて溢れでるくらい溜まってしまった涙の膜を通して眺められる色とりどりの野の花は、正直なところちっとも美しいとは思えなかった。砂埃にまみれた自分のみすばらしい風情を、行き交う人たちに披露するのがとてもきまりが悪いというように、野の花々は道路際の片隅でこちらに背を向けていた。

道路の脇にしゃがみこんで哀れな姿をさらしているぶざまなところを、さっきからどこかでじっと見られていることに、ぼくはふと気がついた。ぼくがはなたでなどを眺めたそれとまったくおなじまなざしで、どここの誰やら定かではない相手もぼくを眺めているという感じは、もはや確信に近いまでになってぼくの胸に伝わっていた。ぼくはそのまなざしの主がひそんでいると覚しいあたりを、おもむろに顔を上げて見渡した。すると額に頭突きでも食らわせるような勢いで、弥勒山が視野いっぱい肉薄してくるところだった。あたかも濃霧の中をさまよう眼明きの盲人といった具合に、尾を曳いて舞い上がる雲のような砂塵によつ

てただでさえ人並み以下のぼくの視力を無用の長物に変えてしまったため、反対方向へすれ違って走り抜けて行った幹線バスの姿もいまでは視野の外に消えていた。そしていま、久方ぶりに帰郷の途についているぼくがまたふたたびでくわした弥勒山はひと際大きく鮮やかなたずまいを見せながら、いつしかぼくの眼の前のしかかるように迫ってくるころだった。

実に不思議な体験だった。昔もいまも何の変哲もないいつもの姿で、弥勒山がいまのあの場所に微動だにせずそびえていたことは疑いのないところなのに、ぼくはそんな弥勒山にでくわしたとたんに、まるで生まれて初めてそれを眺望するように、ある種の驚きをもって山の存在を自分の内部に受け容れているのだ。

ぼくは依然として視線を弥勒山の頂上部に凝らしたきりだった。なぜ弥勒山を驚きをもって迎え入れねばならいいのか、その理由を自分に問うてみたい気分だった。ぼくは弥勒山に向けて自分の耳をそばだててきたつもりだった。

にもかかわらず弥勒山との思いがけぬめぐり会いは、奇妙なことに忘れていたはずの母をまたしても思いださせるきっかけをもたらしたのだ。山は生きている母のなまましい息遣いだけではなしに、訃報が連想させる冷たい死を

も併せて覺らせてくれる、敵役まで引き受けていた。とはいえ、ぼくは、世間の人たちが自分の母の死に遭遇した際に通例として感じる、あの哀しみの境地まではどうしても実感することができなかった。しかも、そんな自分を、さほどどこかしく感じることもなかった。せいぜい弥勒山と正面きって向かい合った姿勢で、一人の女の数奇というほかはなかった生涯のうえにしるされたかすかなピリオドを、一つの運命的な既定の事実として受け容れるだけだった。

黄登面^{オウデンメン}を疾^{ハヤ}づくに通^スり抜け、車は三箕面^{サンギシメン}の境界からかなりのところまで入りこんでいた。当て推量^{ユルチリ}では、栗村^{クリムラ}里^リと西頭里^{セントウリ}の中間のあたりまできていようだった。これから先はさほど高くもない丘を一つ越えてしまえば、道路脇に小さな蓮池^{レンチ}がぬうつと姿を見せるはずだったし、その蓮池のすぐ傍らに一軒家の酒幕^{ジュムク}（居酒屋）があるはずだった。いっそのこと歩いたほうがましなように思われた。えらく高いタクシー代についたものだという気分を拭い切れなかったが、最初に約束した通りの料金を運転手に気前よく払ってやった。

その料金とぼくの顔とを見比べながら、思いもかけなかった成り行きに戸惑いを見せてぶつくさいう運転手に、「ここまでくれば、もう十分だ。すぐ目と鼻の先だから、

ぶらぶら歩いて行くことにするよ」

と、ことさらに虚勢を張って見せてから、ぼくはタクシーを帰してしまった。ひょっとして蓮池の傍らにいまでもあの酒幕が店をだしているようだったら、改めてとろりとした濁白酒^{ダクシヤウ}の二、三杯も引っかけから行くつもりだった。思いが濁白酒に及ぶが早い、鼻孔が開き、タクシーの排気ガスが、黄色っぽい砂埃とともに鼻を打った。すると口の中いっぱい酸っぱい胃液が湧いてきて、またしても胸のあたりがむかつきだした。どっとこみ上げてくる吐き気に備えて、ぼくはふたたび道路脇にしゃがみこんだ。

「そこにいるのは、基範^{ギガン}でねえか」

だしぬけに声をかけられた。松の根を編んでこしらえたはりねずみに似たたわしで、大釜をこすったときにでもたてるようなかん高く快活な声が、きんきんと響いてきた。ぼくは眼鏡を取って手にもった。それから、ズボンの尻のポケットにしまいこまれたハンカチを取りだし、まず眼を拭いてから次にレンズに付着している白粉のような埃の膜を拭き取った。

「やはりそうだ、基範に違えなかったな」

ぼくは手にもった眼鏡を鼻柱へもって行きながら、ゆっくりと立ち上がった。いつの間になんところまで近づいていたのか、上下ともすっかり雪のように真っ白な麻織り

の衣服で固め、竹造りのしゃれた扇子まで開いてもった、風采のよい一人の老人が五、六歩の距離をおいた前方に仁王立ちになっていた。老人がくり返し二度も口になして呼んだ相手の名はまぎれもなく、南基範だった。ひと目見て南基範とわかるような、それらしく振舞った覚えは、ぼくにはまったくなかった。にもかかわらず自信たつぷりに断定しながら、老人はのっけから眼を吊り上げ、たつぷりと糊を利かせた麻織りの衣服に劣らぬくらいこわばった口調で切りだした。

「このお、天下に比類のねえ道理知らずの不屈き者が」

「ご機嫌はいかがですか、令監ニム（令監は年長の男に対する敬称、ニムはくさま）」

「ご機嫌も不機嫌もいっしょくたにして、ちしやにでもくるんでお前だけでたらふく食らうがいい。畜生はいうに及ばず、その日暮らしの虫けらにしたって手前の素性だけは忘れぬといわれておるくれえだのに、いわんや人間の皮なんぞかぶった畜生などでねえ、れっきとした人間さまときているからには、なんぼ何でもお前みてえに道理を弁えぬやつはいねえだぞ」

「申し訳ありません、令監ニム」

「令監ニムも洗柿ニムも、ご免蒙るわい」

息もつかせずまくしたてる老人の見暮に、手にもった竹

の扇子はびりびりと震えていた。後頭部を短く刈り上げた、齒ブラシを思わせる白髪が陽射しを受けて眩しいほどきらきらと輝き、針葉のようにぼくの眼に突き刺さった。けれども、老人の話しぶりは不可解なことに、人間にとって根本となる道理を説いて聞かせようとするそもその厳肅な意図とは不釣り合いに、快活そのものといってよく、どことなく訝しく思われる節があった。

「とにかくソウルの水ときたら、やけに世知辛くできているみてえだな。何け、ソウルでは出世しちまうと、どいつもこいつもお前みてえに塩味になるんかね。人間が人間としての道理きまっとうしていくうえで入用になるから貯えるのが、財産と呼ぶもんでなかったんけ。よしんば億万両の財産き頭の天辺に積んでまわったところで、人間としてのつとめが果たせねえからにや、そつたら財産なんぞ禍のもとになることあつたて、宝の持ち腐れでねえけ。なしてそれが財産といえるだね。お前のおふくろさんがお前のために尽くしてきなさった四十年間の苦勞も、いまとなつちや一滴の泡沫にもひとしかんべな。いやはや、天下に比類のねえ極道者が」

「……」

「おふくろさんの病状の危篤を知らせる飛脚が矢継ぎ早じやったというによ、いま時分になってその出来損ねえの面

あ引っさげてのこのこやって来る、お前みてえな親不孝者は朝鮮八道（道は日本の県に当たる。朝鮮王朝時代の行政区域は八道）どこを探しまわったって、お目にかかれるものではあるまいて」

「ご老人の仰言ことは、いちいちごもつともです」

「この地上に竜華仙境をお築なさろうと、わしらとそつくりの人間の姿きやつして降臨なされた現世の弥勒尊仏であらせられ、末世の大救世主であらせられるわが甌山上帝におかれては往時に説法されていわく、天地開闢の日に天地神明が人間に感応され、心性に墨線を引かれて稻妻をもつて審判なさるとき、よこしまにして偽りごとを茶飯事のごとくおこなう者は、胆が張り裂け、骨の関節はばらばらになると、そう教えられたもんだあ。人の倫き損ねることにもまして大きな罪が、この世にほかにあったかね。急いで駆けつけたら、いまからだってまだ遅くはあるまいて。さあさあ、さつさと尻と端折って突っ走ることだあ」

こちらが耳を貸そうと貸すまいと、とにかく自分の威厳を際立たせることには成功したと思ひこんでいる面持だった。白髪の老人は賑やかに咳払いをくり返し、痰を切つて路上にべつと吐きだすと、竹造りの扇子を忙しく動かしながら八の字歩きをはじめた。腕と足が勢いよく前後に揺れるそのつど、たつぷりと糊をくれたらうえで砧（木の槌で

布地を打つてつやをだすのに使う石または木の台）にかけたに相違ない純白の麻織りの衣服は、さくさくと落ち葉を踏みしだくときのそれに似た音をたてた。

甌山教といえは仏教とはさしたるかかわりのない、新しい弥勒教派の代表的な信仰形態である。母岳山を本拠として全羅道一円に流布されている、教祖だった甌山・姜一淳（注一）の思想はぼくにとつてそれほど生硬なものではなかった。にもかかわらず、それがいまここで唐突に誰ともわからぬ老人の口を借りてだしぬけに飛びだしてきたせいで、ぼくは異国の言葉にでもでくわしたような当惑を覚えないではいられなかった。

とはいえ、ぼくはちつともあの老人を責めたいとは思わなかった。老人のそれは、むしろぼくのほうで望んでいたところかもしれないという思いがした。返す言葉もないほど筋道の立った老人の叱責がぼくに遺していった後味は、子供のころ同級生からしたたか殴られ、鼻腔を伝つて口の中へ流れこんだ、幾らか生臭くもあるが塩辛くもあったあの鼻血の味を思わせるものだった。初めに味わる悲哀にさえ耐えてしまえば鼻血の味は、遠からずして日暮れどきの夕焼けとともに訪れる、ピンクの黄昏にも似たある種の快適な安らぎに転じていったことを、ぼくは不思議にもはつきりと記憶していた。数回にわたって母が危篤であること

を知らせてきた基春からの連絡を受けながらも、酒の盃ばかりなめまわしながらいつまでもソウルでぐずぐずといったずらに時を過ごしながらくが密かに待ち望んだのは、実際のところ鮮紅色にしたたり落ちる鼻血、まさしくそういったものだった。

——はて、あの爺さんは誰だったかな。

到るところ砂利が敷かれていた田舎道は、いまいまいくらいぼくの靴に辛く当たってきた。ぼくはぼくで、靴の先にまといつく石くれをそのつどぼんぼんと蹴とばしながら、ポケットの中を探るようにして丹念に記憶をたどって見た。黒い靴の爪先にはみるみる砂埃がぶ厚く積もっていた。冴えない頭をどのようにひねくりまわしてみたところで、あの老人がはたして何者なのかいっこうに思い浮かばなかった。ひどくでこぼこした路上にどっかか腰を据えている、桁外れに大きな石がぼくにはことのほか目障りに映った。そこで、その石を思いきり強く蹴とばしてみた。とたんに、足の指が折れたようなじーんとする痛みが体全体に走った。が、同時に、ぼくはとっさに失われていた記憶を取り戻すことができた。

春溪旦那だ。

そう、あの老人はまぎれもなく春溪爺さんだった。かなり遅ればせに甦ってきた幼いころの記憶の一端がたちまち、

ぐったりと萎えていたぼくの足に活力を吹きこんでくれた。名の通った祝祭日や村で特別の行事が催されるときなどに、呼びものの一つとして登場する三箕農謡の興趣に富んだ舞台では決まって、しっとりとした咽喉で船唄などを披露してきた近郷近在に名高い歌い手であり、同時にまた遊び人でもあった。それほどにも三箕面一帯では名の通っている春溪旦那を、これまで自分の記憶の外へ綺麗さっぱりと追いやっていたという事実には、ぼくは少なからず驚かされた。春溪旦那が好きでならないものだから、村のちび助どもは村外れにある共同井戸の陰に体を潜ませ、「春溪やーい」といつせいに大声で囃したてては、ひよつとしたら大股のおとなの足に追いつかれるのではという思いに駆られ、死に物狂いで逃げだしたものだ。その時分のことを一つ、また一つと思い起こしながら、ぼくは久しく忘れてきた国訛りの一つを思わず呟いてしまった。

「ほうだつたんけえ」

なるほどそうだったのかという意味で、この地方の人们が好んで口にする郷里の言葉だった。それと意識することなしに呟いた、国訛りであるこの一言がぼくの内面に呼び起こした効果には、端倪すべからざるものがあった。それは子供の手を離れた小さな石英石が、波の静かな蓮池の水面をぼんぼんぱんと跳ねながら水を切って行くときに

呼び起こす、波紋の行列になぞらえられるほどのものだった。自分の言葉の蔵の奥深くに死蔵されてきた、錆のついた国訛りの一言をふとしたことで吐き出したその行為によつて、ぼくの体内のごく微細なある部分から次第に郷里の中へ、ぼくがあんなにも忘れようともがき、捨て去ろうとつとめてきた郷里の垣根の内側へ、それと気づかぬうちに引きこまれていくような気分を瞬間的に味わわれた。そしてそんな気分を、ぼくは自分でも思いがけぬほどあっさりと納得した。

春溪だったのか。あの爺さんもしばらく会わぬ間に、めつきり老けこんでしまったものだな。

ぼくはさきほど春溪老人がさりげなくこぼして行つた話の落穂を、遅蒔きながら慌しく拾い集めた。「急いで駆けつけければ、いまからでもまだ遅くはあるまいて」と耳打ちしてくれたその言葉が、歩き出した一歩ごとに鳥糞（うりこ）そっくりの粘着力をもつてねばねばとまといついてくるのだった。老人は疑いもなく、村の方角から現われていずこかへ向かうところだった。村でごく最近起こった出来事について誰よりもつぶさに知りうる立場にある人物の口から、母の病状が危篤だという言葉が洩れてきたのだ。まさにその点で、ぼくは容易なことではないという思いが心を貫いた。危篤と殞命（いんめい）——亡くなつたとは、その言葉のもつ意味があま

りにも異なっていたからだ。

燕の飛び交うさまが眼に飛びこんできた。フンブの側の燕かノルブの側のそれか（注）は知る由もなかったが、燕は二羽だった。燕たちは数メートルずつの間隔をおいて前方から順繰りに現われては、ちょうど地上をめがけて近接射撃をおこなっている戦闘機編隊といった具合に、ほとんど地上に突き刺さるくらいの勢いで急降下してくると、ぼくの頭上すれすれのところからひよいと空中へ舞い上がつていく、胆を冷やすような芸当を演じて見せていた。燕たちの度を越えた低空飛行が何を意味しているかを、ぼくはあまりにもよく知り尽くしていた。それは遠からずして降ってくるはずの雨を予告する、いわば前触れだった。燕たちが翼を広げ、地上を這うようにして飛び去って行くさまを見守りながらぼくは、たぶん今夜か明日の明け方には間違いないに雨になるだろうと思った。そして、そのように思うことがとりもなおさずかつて自分が馴染んでいた世界へ、もう一步さらに近づきつつあることを意味している事実が気がついて、浮かぬ気分になせられてしまった。そう、それはほかならぬ母の世界だったのだ。ぼくは自分でもそれと意識せぬ間に、母が長い歳月をかけて築き上げてきた難攻不落の迷妄の領域内へ、いつとはなしにゆっくりとのめりこんで行くところだった。

自動車が走る広い道路から、松林のほうへ分かれて入りこんでいる細い枝道が眼に止まった。前方に見渡せる赤茶けた黄土の丘が、歩みとともに見え隠れした。広い道路の両側には、真夏の灼けつくような陽射しにさらされてたつぷりと籠もった地熱を受け、いまを盛りと実を結びつつある稲の絨緞を陳もないくらい敷き詰めて、濃緑色に染まった水田のつらなりが果てしなく広がっていくように思われたが、小高い峠道にさえぎられて風景は絶ち切られてしまっていた。なだらかな斜面を働きの農夫の手が畑に切り開いた丘には、早くも穂をだした陸稲だけが季節に先駆け秋の色づきを見せながら、ぶ厚い絨緞を敷きつめていた。その向こうに見える畑の畝に植えつけられた丈の高いものごと、もろこしよりは低いとはむぎなどが同類の植物同士で何やらひそひそと話し合うような風情で、こっそりとぼくのほうを見おろしていた。あたりにはほとんど人影を見いだすことができなかった。夏の日の屋下がりやの郷里は、絶対君主にも似た静寂の支配に委ねられていた。松林に身を潜めている雄きじの啼き声が二度三度と聞こえてきたが、それとても縦糸と横糸とで緻密に織り上げられている静寂の帷に、さらに一本の太い糸を余分に添えたにすぎなかった。昼日中から正体を失くすほど睡りほうけている怠け者の山野の頭上では、灼けつくような陽射しがじりじりと照

りつけていた。真夏の空らしからぬ、これといって目立つた雲の一つも浮かんではいない空に、空きつ腹を抱えた一羽の鳶がくるりくるりと大きな輪を描きながら、餌を探し求めている。

遠からず雨になるだろうという萌しは、暑さからも感じ取れることだった。ふだんはさほど暑さを感じることはない筋肉質のぼくまでが、たつぷりと汗を絞らなくてはならなかったのだ。ベージュ色のモスリン製の半袖の夏のジャンパーに押えつけられ、Ｔシャツが背中にくったりと絡みついていった。ぼくはジャンパーを脱いで腕にかけてから、韓蒸湯にでも入ったようにむんむんする熱気を発散させている丘を越えた。腕を動かすたびに腋の下からは、饅えたような汗の臭いがして鼻先にまといつた。丘の頂へ登りつめるとともに、ぼくはしばらく姿を隠していた弥勒山とふたたび対面した。ぼくが近づいて行くそれとときおりおなじ距離だけ、弥勒山は一步また一步とやはり饅えたような汗の臭いをさせながらぼくのほうへ迫ってきた。生きている動物の類と変わるところのない弥勒山の体臭は、いまだにかつて結ばれた因縁を声にかわって主張する効果をもった強烈なものだったから、ぼくは郷里の村蓮潭里をかなり前方に眺められる地点にまでたどりついたとき、訳もなしに胸がいっぱいになってくるのをどうすることもでき

なくてしばし足を停めた。

海拔四三〇余メートルにすぎない、遠方から外観を眺めた限りでは巨大な艾石（花崗岩の一種）の固まりである岩山でしかなかった。けれどもその十倍以上の標高を誇る山々と肩を並べうるほど、弥勒山が重要な意味をもっていた時代がいつときぼくにはあった。小白山脈から稜線を分かつ蘆嶺山脈が周辺に散在する大小さまざまの山々をしたがえ徐々になだらかに伸びていき、その果ての裾野を形づくるあたりから、意外なほど広々と平野部が展^{ひら}けていたため、取るに足らぬ標高ながらどこからでも人びとの眼に際だって高く見える山だった。

それはまったくもって、母から一方的に教えこまれた信仰の影響にほかならなかった。十二回目の誕生日を迎えるころまで実際にぼくは、あの山のどこかにヘリポートを真似てつくられた巨大な踏み石があつて、いつかきつと弥勒仏がその石に足を降ろしてこの世に降臨する日のあることを信じて、ほとんど疑わなかった。誕生日の朝まだき、ぼくは母に命じられるままに蓮洞里にある石仏寺まで足を運んで、なにとぞ道（県に相当する行政区）内一流の中学校へ合格させて下さいと敬虔に手を合わせたものだ。その寺には壬辰倭乱（日本という文禄・慶長の役。豊臣秀吉の朝鮮侵略のこと）の折、敵將加藤清正の刀の露となつ

て首を斬り落とされたといひ伝えられている巨大な石仏が、行き方知れずになったほんもののそれに代わるまがい物の首を胴体の上に載せたまま本堂に祀られてあつた。仮りにぼくの願いを殊勝に思し召され、天上界におわす弥勒仏が地上の石仏に降臨されるときは体内へこっそりと忍びこまれるためのコースとして、以前ぼくが母にとまわられて弥勒山の獅子庵へ登つた際に見つけておいた近道と、ヘリポート状の例の巨大な踏み石と天上界とを通し紐で結んだ奇想天外の通路を、頭の中に思い描いてみたものだった。それから、その時分、弥勒仏の靈験があらたかつたせいからは知らないが、とにかくぼくは希望通り一流の中学校へすんなりと合格することができた。

しかし、それはそれとして母が信じてやまぬ弥勒信仰を引き合いにあえて定義づけるならば、弥勒山はいまのところはまだ山とはいえぬわけだった。兜率天におわす弥勒仏がこの先五十六億七千万年ほどたななければ現われぬ未来仏であるのとおなじ理窟で、弥勒山もやはり山には違いないが未来に属する山だった。一人の女として生きてきた母の来し方が、まっとうな女として扱われてきた人生とはとうていいたい悲慘きわまりない、女ならぬ女としての人生といつてよいように、弥勒山は、近郷近在ではもつとも堂々たる山容を備えているのに、その外見に反して、山

としてふさわしい処遇を受けられずにいるにひとしかつた。

いまはまだ山とはいいがたい山、未来の山、弥勒山。

そのときだった。たいそう耳に馴染んでいる俗謡の一節がふと頭に浮かんできた。どこかの女の口を借りて独り言でもつぶやくように、ときには微かにむせび泣くように単調なりズムに乗って流れてくるそのうた声は、いつしかぼくの耳朶のあたりに絡みついてくるようだった。それは歎息にはじまり、歎息に終わる典型的な婦謡の一種だった。

山河の草木を焼く炎も

こぬか雨には消えるもの

あたしの胸を焦がす炎は

土砂降りの雨にも消えやせぬ

現世にあつては歎き哀しむことの多い女が、夜も更けて薄暗いランプの明かりを相手にただ一人で機を織ったり、糸繰り車をまわしたりしながら口ずさむ唄だった。女はいま少しにかわ糊ほどねばつく物干し紐ほど長く伸びる、口笛にも似た溜め息を絞いだすためいつとき息を整えようと素早く次の節へと移っていくのだった。

花よ花よ つつじの花よ

なだらかな平地をどこに置き忘れ

岩また岩の岩陰に

紅い涙を咲かせるの

花よ花よ つつじの花よ

なだらかな平地をどこに捨て

あたしも生まれた時や朱に染まり

岩場の陰に咲いたとか

2

村のたたずまいはいささかも変わってはいなかった。かなり以前、だから基春の結婚式があった年に最後に眺めたあのときのたたずまいと変わったところなどは、ほとんど眼につかなかった。草葺き屋根が瓦やスレートに葺き替えられていて、そうした点にだけ眼をつぶってやれるなら、ぼくの幼年期から少年期にかけての村の風景とまったくおなじだといつていいすぎることにはなるまい。大きなひさごの中に閉じこめられている穀物のように、いつこうに変わっていく萌しもなしに引き籠もっている五十余戸の家々